

令和7年度 杉並区立済美養護学校 学校関係者評価【教職員による自己評価】報告書

実施期間:令和7年12月19日(金)から令和7年12月26日(金) 回答率:83%

<学校運営協議会委員>

- ・渡邊 貴裕 委員長
- ・羽山 歳恵 委員
- ・永田 尚子 委員
- ・澤村 美智子 委員
- ・土佐 愛 委員
- ・伴 比佐志 校長
- ・松原 拓郎 委員
- ・千代延 勝利 委員
- ・村 一浩 委員
- ・柴田 鉄博 委員

学校教育目標	「輝く子ども」	将来、児童・生徒が主体性をもち、豊かな地域生活・社会生活を送れるよう、「自他を認め、社会の中で生きる力と生きる喜びを育む」学校づくりを目指す。
目指す学校像	○児童・生徒が、心身共に安心・安全と感じる教育環境を整え、児童・生徒が人権感覚・人権意識・健康の増進・防災意識を高められる教育活動を推進する学校	
	○児童・生徒が、個別に最適化された学びや協働的な学びの中で、身に付けた力を主体的に発揮し、自立することを目標とした、学習指導の充実を推進する学校	

教職員による評価 評価の尺度【4:優れている 3:良い 2:もう少し 1:要改善】	学校運営協議会による評価
---	--------------

項目	重点となる目標	具体的な取組・評価の観点の例	肯定率	評定	教職員による主な振り返りとさらに良くしていくための具体的な改善案	教職員の評価に対する御意見・御助言 他
【安心と安全】	○生活年齢や発達段階に応じた適切な支援や主体性を尊重した人権を大切にできる心の教育の推進	・自身の人権感覚や人権意識の向上 ・人権に対するセルフチェック ・人権を尊重した指導の徹底	93%	A	○人権尊重・言葉遣いへの配慮 ・敬語や丁寧な言葉遣いを意識 ・注意や称賛の際の言葉掛けの工夫 ・児童・生徒を「さん付け」で呼ぶこと徹底 ○安全・安心な学習環境づくり ・教室内の構造化や仕切りの活用 ・ロッカーや棚の角へのクッション設置 ・毎日の安全点検・教室の見回り ・バスの送迎時の見守り ○児童・生徒の実態把握と発達段階に応じた支援 ・日常的な観察を通した児童・生徒の様子把握 ・発達段階やその日の体調・情緒に応じた柔軟な対応 ・パニック等を未然に防ぐ支援	<p><学校関係者評価の実施に対する御意見></p> <p>・回答率が83パーセントであるが、これは100パーセントでないどダメなのではないだろうか。企業では、100パーセントが基本である。</p> <p>・評価方法について、記名制にしているか。無記名にしたらもっと回答率は上がるのではないか。一方、無責任な回答が生まれることも想定しなければならない。</p> <p>・昨年度、肯定率の低い項目に対し、どのような改善策をたて、どうアプローチしたのかが、この評価方法では見えにくい。実際に、昨年度はどうであったのか。</p> <p>・多岐にわたる項目の中でも、昨年度を受けて重点項目を設定するのはどうだろうか。その中で、経年変化をみとり、取組の効果と課題を見つめていくあり方はいかがだろうか。</p> <p>・今年は、項目ごとに、教員の取組が箇条書きに記載されており、非常に見やすい。どれだけ教員が広い意識をもって取り組んできたかが、よくわかる。一方、現場を知らない者にとっては、具体的な光景や状況が見えにくい。状況が抽象的になってしまう。教員の回答を集計・集約してあるが、記述の中には教員の「生」の声に記載されてい定位と感じる。</p> <p>/「重点となる目標」については、網羅的すぎるという印象を受けた。「重点目標」と「付随目標」にメリハリをつけると、委員も全体像を体系的に把握できるのではないかと思った。</p> <p>※肯定率の低い項目について協議が行われました。</p> <p><学校運営協議会の機能を活用したインクルーシブな社会づくりへの貢献></p> <p>・保護者とのかわりの中では、連絡帳や個別面談などがあるが、学校運営協議会との職員の接点となると、授業参観や給食の試食、懇談会等しかなかった。</p> <p>・学校運営協議会の機能をどのように発揮するかについては、教員がどのような機能を理解しているかによる。学校運営協議会の機能をより発信していく必要があると思う。</p> <p>・この1年間、委員として何ができたかと問われると、これということが言えない。不完全燃焼である。自分の立場でできることを探し、教員に働きかける必要があると思う。</p> <p>・学校支援本部との連携の中で、もっと働きかけることができると思う。</p>
	○健康管理・衛生管理の徹底、安心・安全で、清潔な学習環境の整備	・健康観察 ・安全指導日 ・各教室、校内施設等の点検 ・教室の衛生管理 ・教材教具の安全確認 ・整理・整頓された学習環境	98%	A	◇安全面の強化・事故の未然防止 ・ヒヤリハットや想定外の事故への対応 ・家具配置や教室環境を、児童・生徒の動線・行動特性・日々の状態変化まで含めて見直す ・校内安全委員会の点検 ◇児童・生徒理解・発達段階に応じた支援 ・子どもの情緒の安定をより意識した対応が必要 ・「分かっているつもり」から一歩深める必要性	
	○学校や家庭、保健医等と連携した、計画的な保健指導や、安心・安全かつ安定した医療的ケアの実施	・家庭との連携、情報共有 ・養護教諭と連携した健康観察 ・主体性を引き出す保健指導 ・医療的ケアへの理解と環境の整備	89%	A	○養護教諭・保健室・家庭・外部専門家との連携 ・養護教諭・保健室・管理職・学年との密な情報共有 ・家庭との連絡帳や面談を通した健康・医療的ケアの共有 ・発作時に主治医と連携し、適切な医療・支援機関につなげた ○摂食指導・形態食・給食対応の工夫 ・児童・生徒一人ひとりに合わせた盛り方・配膳・摂食方法の工夫 ・医師やSTの助言を活かした摂食指導 ・外部講師を招いての指導の実施 ・形態食や刻み食、アレルギー対応を適切に実施 ・給食時間の確保や、その日の体調に応じた柔軟な対応	
	○障害の状態に応じた食形態をはじめ、健康な生活を送るための、安心・安全な給食時間の提供	・栄養士や調理員、教員間の連携 ・アレルギー対策検討委員会の充実 ・事故の防止徹底	93%	A	◇教員の専門性・知識の向上 ・摂食指導や形態食、舌・唇の動きなど専門知識の向上 ・外部専門家の助言を活かした指導 ・教員間での摂食指導方法や対応の共有 ・校内研修の計画的な実施 ◇個に応じた対応・観察の深化 ・障害特性や発達段階に応じた摂食指導 ・偏食や拒否行動の観察・配慮 ・児童・生徒の家庭状況や保護者の思いに寄り添った支援	
	○学校運営協議会の機能を理解した連携強化や、特別支援教育の推進等、インクルーシブな社会づくりへの貢献	・地域運営学校の取組への理解、意見交換・情報共有 ・学校の現状の把握と課題解決に向けた報告・連絡・相談 ・地域指定校との連携・出前授業、情報共有による、副籍交流の充実 ・学校見学会を活用した、実態に応じた適切な就学への理解	69%	B	○保護者との連携・情報共有 ・連絡帳、保護者会、個別面談、送迎時などでの情報伝達 ・保護者の希望や願いを尊重した活動の選択 ・懇談会での対話、意見交換 ○学校・地域との協力・交流 ・学校運営協議会や地域組織との対話、現状共有や今後の連携に向けた話し合い ・副籍交流を実施、学校や児童の様子を紹介するクイズなどの交流の工夫など、実施学校間・学級間の協力によるインクルーシブな取組	
	OPTAとの連携や保護者のニーズを把握した情報発信	・PTA・地域との連携と情報発信 ・保護者のニーズの把握と、必要な対応・情報発信	65%	B	◇保護者との連携・ニーズ把握の強化 ・保護者のニーズや意見を十分に把握。 ・担任や学年内の教員からの情報収集 ・副籍交流に関する積極的な情報交換、行動連携 ◇学校運営協議会・PTAとの関わり・理解 ・学校運営協議会・PTAの機能や協議内容の理解と積極的な連携 ・学校全体や外部に関わる事柄の把握の紹介・告知を導入	
	○近隣の学校や地域住民等、地域を意識した実災害を想定した避難訓練の計画・実施や防災教育の推進	・実災害を想定した避難訓練 ・校内環境整備の実施 ・警察・消防との連携	80%	B	○避難訓練・防災対応の実施・改善 ・起震車や煙体験、歩行者シミュレーションなどの実際に体験できる活動の積み重ねの効果 ・緊急時の人数確認や避難方法などの事前学習の定着 ・実際の災害を想定して動く意識や、教員の指示を聞く態度の育成 ○教員間・学年内の連携 ・避難訓練や災害対応について、教員間で体制や手順を確認、実行 ・組織的、計画的な実施と円滑な事後の振り返り ○外部機関・保護者との連携 ・教育センターと連携した避難訓練の計画と実施 ・保護者と情報を共有し、連携をとりながらの体験活動の参加	
	○学校・学部・学年等、関係各所との十分な連携による、組織的な防災体制・危機管理体制の構築	・ヒヤリハットの迅速な周知 ・発災時の対応の理解と連携 ・区立・都立学校の事故事例を参考にした未然防止・解決策の共有	83%	B	◇避難訓練の実施・計画の改善 ・予備日の設定や学年単位での訓練実施など、計画の柔軟性の向上 ・学校全体の教員間で連携しやすい教室配置や役割分担の工夫 ・一つの学校としての学部連携 ◇地域・外部との連携 ・実践的な災害想定や、教育センター以外の地域住民との連携や地域を意識した避難訓練の計画・実施	

【学習の充実】	<p>○時数管理や年間指導計画の適切な実施・評価等、教育課程の確実な実施</p>	<p>・時数管理と指導計画に基づいた計画的な授業実践と評価 ・主体性、自主性を育む教育活動 ・杉並区教育研究指定校としての研究の取組</p>	90%	A	<p>○年間指導計画・授業管理の徹底 ・年間指導計画や授業時数に沿った授業の実施 ・学年会や教員間の事前の相談・確認による、統一した指導 ・引き継ぎによる計画的な指導・評価 ○児童・生徒の実態に応じた指導 ・発達段階や実態に合わせたスモールステップの指導 ・楽しく主体的に学べる授業の展開 ・外部専門家の意見を取り入れた、個に応じた指導・支援 ○授業改善・研究活動の実践 ・研究授業や協議会での助言を活かした授業改善 ・主体性や行動面、情緒面の成長を意識した授業づくり ・児童・生徒が自ら活動に参加する姿や成長の確認 ・集団指導や協働的学習を取り入れた、児童・生徒同士の関わりの質の向上</p>
<p>○各教科の指導・教科等を合わせた指導の関連性を重視した指導計画・単元計画の見直しや、児童・生徒が主体的・対話的な深い学びを実現できる、主体性の評価</p>	<p>・主体性を引き出す指導と適切な評価をテーマとした授業研究 ・日々の授業や研究授業を通じた、授業改善 ・分かる授業の構築、必要に応じたICT機器やオンライン環境の活用</p>	89%	A	<p>◇指導の系統性・年間計画の見直し ・学年全体の年間指導計画を十分な検討。教科会等を活用した、見通しのある計画と実践 ・自立活動との関連についての明確化 ◇個別最適な指導と教員間の連携 ・児童・生徒の実態に即した学習課題や教材・教具の難易度などの環境調整による、授業内容の見直し ・個別指導計画をもとにした、学年全体の教員による複数の視点を生かした個別最適な指導の充実と継続</p>	
<p>○家庭と連携し、特別支援教育の専門性を活かした、根拠のある個別指導計画の作成と適切な評価</p>	<p>・教員と外部専門員との協働 ・具体的な学習目標の設定と適切な評価 ・個別指導計画と学校生活支援シートを活用した家庭との連携</p>	89%	A	<p>○保護者との連携を重視した個別指導計画の作成・評価 ・面談や保護者会、日常のやりとりを通して保護者と情報共有 ・思いや願いを踏まえた個別指導計画・学校生活支援シートを作成・評価 ○児童・生徒の実態把握に基づく個別最適な計画づくり ・障害特性や発達段階等の丁寧な実態把握 ・「できる」を実感できるスモールステップの無理のない目標設定 ○外部専門家・専門性を生かした指導・支援 ・外部専門家との密な連携 ・外部専門家の助言を生かした取組 ・心理検査（アセスメント）を活用した、支援内容の検討や優先順位付け</p>	
<p>○家庭と連携し、児童・生徒の将来の社会自立の目標を共通理解した、適切な学校生活支援シートの作成と適切な評価</p>	<p>・実態に応じた、適切な教材・教具の選定</p>	81%	B	<p>◇個別指導計画・支援シートの評価の向上 ・教員個々の主観に偏らない、他教員との振り返りや意見交換を通じた客観的な評価 ・保護者にも分かりやすく3観点の評価を伝える記述力 ◇目標設定の妥当性と将来を見据えた視点 ・社会自立などの将来を見据えた視点を反映させた計画の作成 ・アセスメントを活用した、より実態に即した適切な目標設定</p>	
<p>○都立特別支援学校との連携や、将来の社会生活における自立を見据えた、小学部・中学部の各段階における計画的・系統的な進路指導の充実</p>	<p>・主体性・自主性の向上を意識した、係活動や作業学習・職場体験実習の実施 ・作業学習の成果物を介しての交流 ・保護者に向けた進路情報の発信</p>	60%	B	<p>○児童・生徒の自立支援・校内外での移動や行動指導 ・校内移動や登下校において、児童・生徒が目的地まで一人で移動できるような指導・支援 ・保護者や教員間で連携した登下校指導の目標設定 ○進路・段階的指導の実施 ・中学部や高等部へのつながりを意識した段階的な進路学習や職業・家庭の指導を実施 ・中学部の協力による小学部高学年の乗り入れ授業 ・高等部見学や都立特別支援学校・福祉作業所への見学・体験などの連携</p>	
<p>○将来の自立に向けた一人通学を視野に入れた、登下校指導の充実</p>	<p>・SB乗務員との連携、情報共有 ・登下校時の安全指導 ・安全確保の徹底 ・校舎間の安全な登下校指導や一人通学指導</p>	44%	C	<p>◇一人通学に向けた指導の全校的な計画と実施 ・学校全体としての小学部段階からの一人通学を目指した計画や準備 ・計画的・段階的な登下校指導、安全指導などの基礎的取り組みの強化 ・一人通学や登下校練習における保護者との連携・協力 ・家庭の事情による計画的な進路体験や登下校練習の制限への対応 ○児童・生徒の将来や社会参加を意識した指導 ・卒業後や将来的な社会自立を見据えた指導 ・児童・生徒の特性や興味を把握し、それを進路や生活指導に活かした長期的な取組 ・校舎が別れたことによる、交流・体験機会の不足、児童の進学後の見通しが付きにくい状況への対応</p>	
<p>○学校運営協議会との連携や、児童・生徒が地域で学び、地域で活躍できる場の提供、地域への貢献を実感できる学習活動の工夫</p>	<p>・青少年赤十字の活動や、地域資産、外部の教育力を活用した学習活動と授業改善 ・近隣小・中学校、特別支援学校との交流・連携、行事への参加 ・DA/LEDAとの協働と活動を生かした授業改善への取組 ・ふれあいアートギャラリーを通じた、地域との協働</p>	58%	C	<p>○地域や校外での学習活動の充実 ・歩行学習や公共交通機関の利用など、実際に地域と関わる中で、生活スキルや安全意識を身に付けることを意識した活動を計画的に実施。 ○地域・外部機関との連携 ・地域資源や地域の教育力を活用した教育活動の実施 ◇地域や学校運営協議会との連携 ・学校運営協議会との関わりや直接的な交流 ・学校支援本部による授業づくり、地域人材の活用 ・青少年赤十字等の特活部の創設 ◇地域を意識した学習や活動 ・児童・生徒にとっての、地域を意識した学習指導や地域貢献を実感できる学習活動 ・児童・生徒にとって、実感や学びに結び付く指導の工夫</p>	
<p>○ライン業務の徹底と、個々の職責を明確化した組織的な業務遂行</p>	<p>・管理職と主幹教諭間の報告・連絡・相談の徹底による情報共有と迅速な組織的な課題解決 ・主幹教諭と学年主任の連携における学部運営会議の活性化</p>	79%	B	<p>○業務遂行・計画性・効率化 ・計画的な業務遂行、質を維持しながらの業務の効率化・軽減への工夫 ・勤務時間内で業務を行うための、余裕をもった準備 ○協力・連携・報告・相談 ・学年や学校業務について、確実な事前・事後の相談や報告 ・学年内の情報や業務の進捗状況を管理職や主幹教諭と共有</p>	
<p>○小集団グループによる、意図的・計画的な専門性向上のための研修の実施・参加や、相互の学び合いを意識した、実践的なOJT</p>	<p>・少人数グループの活用、個々の教員の得意分野や専門性を生かし合える気兼ねない日常的なOJT</p>	75%	B	<p>○研修・専門性向上 ・若手教員への指導やOTJによる支援を通じた、教員全体への意識向上 ・特別支援教育の知識・指導法等、校内外の研修や勉強会への積極的な参加 ・校内研究グループによる、児童・生徒の主体性を引き出す手立てについての検討や研究授業の提案</p>	
<p>○業務分担の適正化や業務軽減による、余裕を持った職務遂行と働き方改革の推進</p>	<p>・業務の円滑化を生かした職務の遂行 ・前例踏襲にとらわれない業務の精選 ・定時退庁日の継続</p>	58%	C	<p>◇組織運営・分掌の在り方 ・全員が自分事として分掌業務に関われる環境づくり ・小学部・中学部の分掌連携 ・業務内容の適切な分担と組織的な対応 ・主任→主幹→副校長の相談・報告経路を徹底 ・見通しを共有し、全員が「自分事」として関われる体制づくり ◇研究・OJT・人材育成</p>	
<p>○担当業務の意味や目的を明確化した、新しい施策に全教職員が積極的に参画できるような学校運営</p>	<p>・各会議、分掌・委員会における課題の共有と役割の明確化 ・担当業務における事故やヒヤリハットの未然防止の徹底</p>	60%	B	<p>・研究の継続性と人材育成の仕組みづくり ・ロールモデルとなる教員層の育成 ・年次研修・中堅教諭資質向上研修を機とする、人事育成の活性化 ・主幹教諭・管理職候補者の育成につなぐ人材育成の充実</p>	

※特に肯定率の低い項目について協議が行われました。

<一人通学、登下校の指導について>
<学校運営協議会との連携>
・保護者として、先生方が作ってくださる個別指導計画を受け取っているが、その中に一人での登校をゴールとして位置づけていく視点は、これからも必要なのではないだろうか。
・中学部卒業後、そして高等部進学を見据えた登下校について、各学年でどこまで到達していればよいかを位置づけていくことはいかがだろうか。
・保護者としては、一人通学・一人登校は、実際に直面した時に初めて不安と恐怖を感じる。バス停に行くまでどれだけ大変か、高等部進学が意識されたとき初めて一人通学の現実を意識した。
・現実を見つめると、一人通学は正直怖い。不安である。肯定率44パーセントは、指導者が意識している率として妥当なのではないだろうか。
・住んでいる近所を学びのステージとして、小さいころからの経験の積み重ねが大切だと考える。

→学校運営協議会や、これから発足する地域支援本部のメンバーによる協力が欠かせないのではないかと。
→地域支援本部のメンバーだけでなく、本部が見守り隊のメンバーを募り、要所に立ったり、挨拶をしたりして、安全を確保する体制をつくるのはアイデアの一つだと考える。
→地域支援本部が地域の目になる。それをコーディネートする職員が必要である。学習活動として計画立案する必要がある。

<教職員の働き方改革の推進>
・この項目すべてを教職員一人一人が振り返るだけでも実はとても大変なのではないだろうか。
・多岐にわたる業務の中で、重点を設定し、変化を見つめ、その要因と成果を検証することが年度末評価であってほしい。
・業務が多岐に渡っている。教員の離職率が高く、体調を崩す職員が少なからずいる。離職率を減らしたいという職員と懇談をしたことが心に残っている。業務の精選について考えていきたい。